「中国での築きと気付き」
1-B　筑波大学　安藤鷹ソロ

今回の中国での１週間の間で、自分は多くの方と友情を築き、同時に多くの気付きを得ることができました。中国に対する私の見方は大きく好転したと言えるでしょう。西安で食べたビャンビャン麺は絶品でしたし、万里の長城の迫力は本当に凄まじいものでした。しかし、訪中で得た思い出の中で最も自分の心に残っているのは、中日友好協会の皆さんや北京および西安外国語大学の学生の皆さん、訪中団の他の団員の皆さんとのたわいもない話や築いた友情の数々であります。皆さんと交流していると、自分の心がポカポカ暖かくなっていくのがわかりました。このポカポカは是非とも日中両国の国民全員、いや全世界の人々に味わってもらいたいです。お互いの国に関心を持ち、尊敬の気持ちを持つ人同士の交流というものは本当に清々しく、気持ちの良いものであると今回の訪中で自分は学ぶことができました。本当に皆さんには感謝しかありません。

今の日中関係は非常に重要な局面に立っているのは言うまでもありません。今のギスギスした関係を今後よくしていくには、日本の国民はアメリカと中国の対立から日本を独立させて日中関係について考察して行かなければならないと自分は改めて気付かされました。日本の政治は戦後からアメリカとの結びつきが過剰とも言えるほど強く、他国との関係を構築する際の弊害にもなったりしました。アメリカとの関係ももちろん重要ではあるのですが、今、日本の外交にとって最も重要なのはこの中国とのギスギスを解消することであると言えるでしょう。日本人は、今一度自分たちが今後の日中関係にどう進んでいって欲しいかを、米中対立から切り離して、改めて自分に問うべきだと思います。

今回の訪中を経て自分は学生などの一般市民の交流が国家間関係においてどれほど重要なのかに気づきました。相手を真に理解するには、まず実際に相手とあって話すことは必要不可欠であり理解に向けての最初の手順と言えるでしょう。逆にこの手順を欠いてしまうと相手の人物像を別の人の発言や媒体を介してしか構築することができず、真の理解を得ることは難しいと言えるでしょう。現在、両国国民の互いへの印象があまり良くないことも、この交流の少なさに起因しているのかも知れません。日本と中国は起源が共通する文化が多いのでそれを活かして、もっと文化面での交流を盛んにして相互理解を深め、誤解や偏見をなくしていくべきなのではないでしょうか。

以上、自分が今回の訪中で得た築きと気づきでした。今後、自分はこれらの得たものをしっかり活用して、日中関係の改善に向けて自分ができることを一つ一つ実行していきたいです。日本でも中国人の人々との交流は充分可能です。自分は、中国で中日友好協会や

二つの外国語大学の皆さんが自分らに見せてくれた同じ優しさと思いやりを持って、日本にやってきた中国人の方々と接して行きたいと思っています。

「日中友好関係を築くために今後できること」
1-B 慶應義塾大学 井神有沙

わたしが日中友好訪中団員として中国に滞在し、日中関係についてと自身の将来について考えた。
まず、日中関係について 2 つ考えた。
1 つ目は、ローカルを知ることの必要性を感じ、日中関係の改善のために、より多角的に日中について学びたいと考えた。先述したように、中国には日本にネガティブな想いをもつひとも多いと考える。今回の訪中ではさまざまな体験をし、多くの人々に出会うことができたが、中国の人々のローカルな生活を知れる機会は少なく、また交流は日本に対してポジティブな考え持つ人とのものであった。もっと中国のローカルな生活や考えを知り、日本や日中関係に対するネガティブな、中立的な意見に耳を傾けることが、日中関係の改善には不可欠であると考える。今回の訪中では中国の日本に対するポジティブな意見を知ることができたが、それだけを見るのではなく、ネガティブな考えや意見を知ることも大切にしたいと考えた。
2 つ目は日中関係の改善のためには、若者どうしの交流が不可欠であると考えた。関係改善のためには、将来の日中関係を担う若者同士の相互理解が必要となる。またそれだけでなく、未来を担う若者同士の交流は、堅い話を聞くよりも若者自身の共感と興味につながる。若者同士の活発な交流が今後の両国の関係と世界平和の鍵となる。
次に、自身の今後について 2 つ考えた。
1 つ目は、リアルを知ることの重要性を学び、自身がもっている固定概念に気付き自分の目で真実を確かめることが大切だと考えた。訪中前わたしは、日中は対立関係にあり、中国のほとんどの人は日本を嫌っていると思っていた。しかし、実際に中国で中国の方と交流すると、日本に興味をもち日本文化や日本を好いている人にたくさん出会うことができた。本経験を通して、SNS などによる情報やステレオタイプにとらわれず、自分の五感で体験し、自分自身でリアルを知ったうえで意見をもつことを大切にしたい。
2 つ目は、人との出会いの素晴らしさを学び、これまでの出会いを大切にし、より多くの出会いを求めたいと考えた。今回の訪中では本当に多くの人々と出会うことができた。日中友好関係のために尽力されている方、日本各国から来たさまざまな背景をもつ学生さん、私たちに最高のおもてなしをしてくださった中国の学生さんやガイドさん。これらの出会いを通して 2 つのことを考えた。1 つ目は、日中の関係のために個人としてできることは数多くあるということである。訪中前のわたしは、国同士の関係は自身への影響は少なく、また自身が国家間の関係に影響を与えることは難しいと考えていた。確かに日中関係を今すぐ完全に改善することは難しいが、自身で中国を知ることは改善への第一歩であり、一人ひとりが相互理解を進めることで関係改善に繋げられると考えた。そのために、わたしはより中国について学び、また周りの人が中国や日中関係に興味をもつきっかけになりたいと考

ている。2 つ目は、より多くのことに挑戦したいと考えた。今回の訪中では、日中の多くの学生に出会った―他国に興味をもち勉学に励む学生、厳しい就職活動に取り組む学生、世界各国を冒険する学生、ビジネスを学び世界について語る学生。各分野で尽力する学生さんと出会い、話したことで刺激を受け、失敗を恐れず興味をもったことに果敢に挑戦していきたいと考えた。

「訪中での気づき」
1-B 南山大学 井野靖子

今回の訪中は、私にとって非常にかけがえのない経験になった。訪中前の中国への印象は、どちらかというとネガティブだった。中国語を学んでおり、言語には関心があったものの、国についてはほとんど知らなかったし、知ろうともしていなかった。そして、メディアの過激な情報を鵜呑みにして、あまり良くない印象を抱いていた。ビザの申請では、家族の情報まで詳細に伝える必要があり、監視社会であることを感じると共に、これまでのネガティブな印象から、恐怖と不安があった。反日の人が多いから、日本人は歓迎されないだろうと家族や親戚にも心配されていた。

しかし、実際に中国に行くと、その印象は大きく変わった。北京外国語大学や西安外国語大学での学生交流では、プラカードを作って私たちを迎えてくれたり、プレゼントを用意してくれたり、自分の生活環境をいきいきと紹介してくれたりと、私たちを非常に歓迎してくれた。日本が好きで日本語を勉強し始めた人や、日本の文化に関心がある人たちとも出会うことができ、日本に関心を持ってくれていることに嬉しさを感じた。彼らとの出会いで、反日の人ばかりではないと気づくことができた。また、ホテルや売店、レストランにおいて、スタッフの優しさを感じる場面も多くあった。「中国人は怖い」とどこか特別扱いをしていたが、どこの国も変わらないことに改めて気づかされた。同じ人間であり、言語の垣根を超えて心を通わせることができるのだ。歴史や政治的な面のみで判断し、グループとして中国の印象を決めていたが、きちんと自分の目で見て、その人自身と向き合う必要があると感じた。今回の訪中では反日の人と出会うことはなかったが、もちろんいるだろう。しかし、それは中国に限ったことではないし、中国にも日本のことが好きな人がいる。訪中前よりもフラットな視点で中国を見ることができるようになったことが、私にとって大きな変化である。

そして、日中交流だけでなく、日本人同士の交流でも多くの良い影響を受けることができた。日中関係や中国でのニュースに関心がある班員や、独学で中国語スキルを身につけた班員、様々な日本文化に精通している班員など、中国や国際交流に関心の高い班員と出会うことができた。彼らから多くの刺激をもらうことができた。私もさらに高いアンテナを張って、日中関係や中国のニュースについて考え、自分の意見を持ちたい。直接コミュニケーションが取れるように、中国語の会話スキルを身につけたい。このような目標がいくつも見つかり、自分の可能性を広げられたことに非常に嬉しさを感じる。多くの経験をし、新たな出会いがあり、この 1 週間は本当に忘れられないほど、かけがえのない経験になった。班員や中国で出会った学生とこれからも連絡を取り合っていきたい。これから、日本と中国が隣国として、良い関係を築いていくことを心から願っている。私も日中友好に携わっていきたいと強く感じた。

「一週間の訪中を通して」
1-B　中央大学　牛島英利

日中友好大学生訪中団に参加し、一週間の間に 92 人の大学生と 8 人の事務局の方々、現地の案内人の方々とともに、北京、西安、上海を訪れました。

まず北京では、北京外国語大学を訪れ、中国の学生たちと交流しました。修士 1 年生の学生と交流し、彼らの日本語能力の高さに驚きました。グループディスカッションでのお題は日中の好きな芸能人でした。そこで友達になった人とウィチャットを交換し、その後もやり取りをしています。また、万里の長城を訪れた際には、今まで歴史の教科書で見ていた景色が目の前にあり、その壮大さと歴史の重みを肌で感じました。想像していたよりもずっと急勾配で登るのが大変でした。ガイドさんに教えてもらった、毛沢東の「長城に到らざれば好漢に非ず」という言葉が身に染みました。

次に、西安では、兵馬俑博物館を訪れました。大きな会場にずらりと並ぶ兵馬俑に圧倒されました。そして何より観光客の数が多く、中国での兵馬俑の人気が伺えました。また、西安外国語大学でも学生と交流の機会があり、学部 1 年生の女の子とペアになり、キャンパス内を見学しました。日本語の勉強を始めたばかりの彼女と、日本語と英語と中国語を交えてコミュニケーションをとるのは楽しかったです。私自身ももっと中国語を勉強しなければならないと感じました。企業見学では、铂力特を訪れました。建物に入る前に、バスの中で一人一人のスマートフォンのカメラにシールを貼られ、くれぐれも写真撮影をしないようにと念を押されました。今までの伝統的な製造業では作れない、一人一人に合わせて作る医療用の部品や、中を空洞にして軽量化を計る技術などが魅力的でした。観光旅行ではできないことをさせていただきました。

さらに、上海ではクルーズで、夜の街並みを堪能しました。上海の夜景は、本当に美しく、現代的な都市の一面と外灘の歴史的な建物群のコントラストが印象的でした。班のみんなと船の先頭で風を感じ、最後の夜、中国での一週間に別れを告げました。上海は元より一泊の予定だったにも拘わらず、西安からの飛行機が遅れてしまい、さらに滞在時間が短くなり物足りなかったので、もっと見て回りたいと思い、帰国後に 9 月の上海行きの飛行機を取りました。その時に今回予定から外れてしまった豫園にも行きたいです。

1 週間の中で、最も好きだった場所は大雁塔です。私は書道に興味があり、大雁塔にある雁塔聖教序の臨書も行ってきました。そんな憧れの土地に訪れることができて、玄奘に関連する資料も見られたことが感無量でした。しかし、大雁塔の入り口にある雁塔聖教序が見られなかったことが残念なので、またリベンジしたいです。大唐不夜城では、様々な歴史上の人物の像があり、その中に私の 1 番好きな顔真卿の像もありました。本場で愛されていることが伝わり嬉しかったです。

そして、全体を通して盛大なおもてなしを受けました。毎度の食事が豪勢でどれもおいしく、日本に帰ってきた今、あの本場の中華料理が恋しいです。会う方々も皆温かく、訪中団

関係者だけでなく、街中で出会う人も、笑顔で迎えてくださいました。この一週間の訪中団の経験の中で、中国に長期留学をしたいという思いが芽生え、強くなりました。私は今、大学の中国言語文化専攻に所属し、一時は交換留学も考えたのですがタイミングを逃してしまい、短期留学で手を打とうとしていたところでした。しかし、実際に現地を訪れたことと、班の中で１年休学して長期留学に行った人、これから行く人、行けなくて後悔している人に出会い、話を聞いたことが自分の中で心に残っており、卒業を 1 年延ばして１年の留学に行きたいと思うようになりました。改めて、ありがとうございました。この経験は私の宝物です。

「訪中での学び」
1-B 福井県立大学 金井琴花

中国への訪問前、私の中国に対するイメージは、主にメディアや書籍から得られた情報と大学内の留学生の話の中で得た情報だけで作り上げられていました。訪中前から中国は歴史と文化が非常に豊かで、経済発展も著しい国だという認識がありましたのでその現状を自分の目で見てみたいという思いが強くありました。訪中プログラムに参加することになり、ワクワクした気持ちで中国に向かいました。実際に中国での生活や現地の大学生との交流を通じて、私の考え方は変わりました。まず、中国の人々の温かさと親切さを実感しました。西安外国語大学では学生が親切に接してくれたり日本から来たことを歓迎してくれたりして、飲み物やスイカを買ってくれました。こんなによくしてくれる理由を聞くと、「あなた達は日本から来てくれたお客様だから」と覚えたての日本語で伝えてくれて胸が暖かくなりました。私も海外から友達が来たらこんなおもてなしをしてあげようという気持ちになりました。また、彼らの多くは外国語を学ぶ大学であったためか非常に現代的でグローバルな視野を持っており、国際社会の一員としての意識が高いことを感じました。外国の文化に詳しく、特に日本の文化に関して私でさえ知らないことまで知っているかのようでした。この訪中プログラムを通じて、私は中国に対するより深い理解を得ることができました。

今後、中国とどのように付き合っていくべきかについて考えると、まずは相互理解と尊重が大切だと考えます。異なる文化や価値観を持つ国同士が協力するためには、まずお互いを知り、理解する努力が必要です。訪中プログラムのような交流の機会は両国の関係にとってとてもいいものだと思います。さらに、私たち個人レベルでも、中国に対する理解を深める努力が必要です。メディアや書籍だけでなく、実際に中国を訪れたり、中国人と直接話す機会を持つことで、偏見や誤解を減らすことができると思います。訪中プログラムでは、異なる文化や価値観に触れることで、自分自身の視野が広がり、世界をより多面的に見ることができるようになりました。また、中国という国が持つ多様性や複雑さを理解することで、国際社会の一員としてどのように行動すべきかについても考えるきっかけとなりました。

最後に私の個人的な感想です。今回の訪中では中国の政治の中心である北京、歴史の深い西安、現代的な街上海のそれぞれ特徴の違う 3 つの都市を回ることができてとても有意義な時間を過ごすことができました。万里の長城や兵馬俑では、中国国内からの旅行客の姿も多く見られ、現地の人どうしの会話が飛び交う環境の中に身を置けたことはとても貴重な体験となりました。個人の反省点として、中国に対する知識だけでなく母国の知識が足りなかったことです。中国の学生との交流の中で中国の学生は日本の文化や歴史、現代の文化まで興味を持って調べていて、詳しく聞かれると答えられないことが多くあり、悔しい思いをしました。また、中国の学生に質問をしようにもありきたりな質問になってしまうことが自分の視野を広げられてないような気持ちになってしまいました。ですので日本の文化や歴史を少し勉強して他国の人と関わる機会には、自信を持って答えられるようになりたい

と思いました。今回のプログラムの中でいろんな人と話をして、中国だけでなく他の国にも興味がある人たちが多くいました。海外経験のある人たちの話が聞けて、世界旅がしたいという気持ちが強くなりました。今回の訪中では、一生懸命に中国語を使って会話しようとすると丁寧に説明してくださったり、笑顔になってくれたりしてお互いに気持ちが良かったです。他の国に旅行する際にも、現地の言葉を少しは学んで行くことで相手の国を尊重している気持ちが伝わると思いました。

最後に、団長の川津先生をはじめ、引率の先生方々1 週間ありがとうございました。今後も、今回の訪中で感じたことを思い出しながら中国の文化を勉強したり、中国語を勉強したり、中国の方々と交流したり、と中国に対する学びを深めていきたいと思います。

中国は、広くてまだまだ見れていない部分が多いです。今後も疑問に思ったり、興味を持ったことには実際に現地へ行って自分の目で見て考えてということを忘れずにいます。

「訪中団で得た大きな財産」
1-B 愛知大学　河田大輝

今回の訪中での私の目標は実際の中国に関する報道などではなく自分の感覚で生の中国に触れ、今後の未来を担う若者の代表として今回の訪中団に参加し日中関係について真剣に考えることでした。そしてこの訪中で大きく二つの成果を得ました。一つ目は、日本から一緒に参加した大学生たちとの出会いです。彼らとは、お互いにこれから日本を背負う若者代表として訪中団に参加し、日中関係だけでなく多くの問題や疑問を本気で議論し合い、刺激し合い、学び合うことができました。仲間と七日間過ごすことでこれまで考えてこなかった広い視野や価値観、知識と自分の考えや問題意識そして経験などを議論し合い、人生で一番自分の世界観が変わったそんな有意義な時間でした。この訪中で出会うことが出来た友は一生仲良く、高め合える最高の友です。1B のみんな今後は海外に行き勉強や仕事をして活躍する人、大学で自分の知見や経験を増やしどんどん成長される方ばかりです。私もそんなみんなに会えることを楽しみにこれから残り少ない大学生活を有意義な物にするために様々なことに挑戦し切磋琢磨し、いつかまたみんなでまた共有することが出来たら一番幸せなことかも知れません。そう本気で思うほどこの七日間は刺激的で有意義でそして一生の友が出来たそんな訪中でした。こんなことを言うのは恥ずかしいですが、1B のみんな大好きで す。いつかまた今世で語り合いましょう。

そして二つ目の成果は学校では学べないことを自分で沢山体験し学ぶことが出来たと言うことです。その一つに今回の訪中団では日中友好のためにとても大事な機会であり、訪中団の川津隆団長が始めにおっしゃっていた一人一人が外交官のように行動しようという意識や考えもこの訪中団に参加しないと経験できない考えであり、学生でありながら政治や外交の一端に触れたとても貴重な経験でした。この訪中では人生で一番外交や政治に関わったような感覚を覚えより外交や政治に興味を持つきっかけになりました。

また今回の訪中では歴史や自然に触れ教科書に載っている有名な場所に訪れただけでなく、実際の中国の同年代の日本に興味を持ち、親切に接してくれる現地の学生たちと交流する機会がありました。彼らとの対話を通じて、私の中国に対するイメージが大きく変わりました。現地の学生たちの親切さや熱意に触れ、彼らとの交流や友情が深まりました。現地ではとても親切に歓迎していただき、日本に来たときに歓迎すると約束をし、今でも連絡を取り合っていて再会できる日をとても楽しみにしています。そして現地の学生と交流を通して僕の心がとても温かくなりました。このような経験が出来たのはこの訪中団で得た大きな成果だと思います。

この訪中団の経験を通じて、最高の日本での友達を得たことはもちろんのこと、私は中国の歴史、文化、そして現地の人々の魅力を再認識し、特に現地の学生たちとの交流を通じて、国境を超えた真の友好を築くことができました。今後もこの経験を活かし、さらなる異文化理解と交流を深めていきたいと考えています。またこの素晴らしい経験を自分の将来に生

かしていきたいと思います。そしてこの訪中団の素晴らしさや有意義性を友達に是非勧めたいと思いました。

改めましてこの訪中団に参加させていただき、このような機会を与えてくださった日中友好協会の関係者方皆々様、そして訪中団を招待して、歓迎してくださった中国政府の皆々様、そして僕たちを暖かく迎えてくださった現地の皆々様本当にありがとうございました。

「訪中から学んだ異文化理解」
1-B 上智大学　黒川彩乃

訪中前、私は中国に対して日本や他国とかけ離れたイメージを抱いていた。広大な土地、悠久の歴史、社会主義、情報統制、そうした机上で学んだキーワードのみから人々の暮らしや日常の風景も異なるものであると想像していた。今回の訪中を通して実感したのは、中国の人々は想像以上に私たちと「変わらない」ということだ。特に同年代の大学生との交流を通じて感じた。今回交流した北京外国語大学・西安外国語大学の学生は日本語学科ということもあり日本に対して良い印象・興味を抱いてくれている学生たちでもあったが、何気ない会話は日本の学生と変わらないものだった。好きなドラマや俳優、KPOP、食べ物、恋人についての話などで盛り上がり、同じ世界で生きていることを実感した。隣国に生き、未来を担っていく仲間たちが理解し協力し合える存在であると認識できたことは実際に訪中したからこそ感じられたことであり自分にとって大きな出来事だった。

一方、私は大学で中国家族の社会学について学んでいたが、その授業内容と乖離していた点・合致していた点があり興味深かった。授業の中で、中国人は自分の家を踏み出た瞬間秩序を重んじなくなる（廊下は汚してもいいものと考えるなど）と聞いていた。今回実際に人々の生活を覗いた訳ではなかったが、バスの窓から見た中国の風景は想像以上に整頓されていた。日本ではあまり広まっていない貸し出し自転車が特に特徴的だった。中国の道路には多くの自転車が並んでいたが、それらも綺麗に並べられ、秩序が乱れた風景とはかけ離れていた。一方で兵馬俑博物館を訪れた際のトイレもまた印象的だった。並んでいる際の割り込みや日本ではないような汚れ方には多少驚いた。事前に中国人教授の話を聞いていたこともありそれらの行動にショックを受けることもなかったし、トイレに並んでいることを伝えれば何事もなかったかのように譲ってくれた。例えがあまり良くなかったかもしれないが、私は人々の育ってきた背景やその人々にとっての当たり前を理解することの大切さを言いたい。異なる国で育ってきたからには自分たちにない感情や行動も当然であり、それらを「違」と捉えずに学び理解することが必要だと考える。中国に限らず日本国内でも世界中の人々と交流する際にも大切な心構えではないだろうか。一人一人が持っているバックグラウンドは自分とは異なる。だが不正解と捉えるのではなく、なぜそのような感情を持ち文化が生まれるのかそれらを心の底から理解できるような人間になりたいとこの訪中を通して改めて感じさせられた。

この 7 日間にたくさんの刺激があった。積極的に活動し自分の軸を持っている日本の学生との交流・日本に興味を持ち交流を楽しんでくれた中国の学生との出会い・歴史好きな私にはたまらない古代中国の豊かな文明を目にしたことなど、様々な出会いと経験が私の学習意欲を掻き立ててくれた。まだまだ未知の世界がたくさんあることを実感し、今後も自分の興味関心に貪欲になり、学び、そして実際に体験することを大切にしたいと感じた。

「日本人の中国に対する認識と実際」
1-B　北海道大学　郡山結人

私は以前から一般メディアだけではなく、中国人 YouTuber の動画や日本の一般的な報道では取り上げられない視点で作られたドキュメンタリー等からも中国の現状に関する情報を集めていたり、中国法の授業を通して現代中国について勉強したり、多数の中国人の友達から様々な話を聞いていたり、一度上海に訪れたことがあったりしていたため、今回の訪中ではそれほど大きく中国に対する捉え方が変わることはなかった。しかしながら、周りの友達には街がきれいで整然としていることや空が汚染されていないことに驚き、自らがそれ以前に抱いていた中国に対するイメージとのギャップを感じているようだった。また私自身も、たとえ知識や情報として理解していたとしても、実際に現地に訪れることで自らの認識の確かさを確認したり、街の雰囲気を体感したりすることができた。

今回の研修の参加者の多くは中国やその文化に対して既に一定の知識や理解を持っているように感じたが、私の体感では日本人の大多数は中国に対して偏見や一時代前のイメージを持っている人が多いと感じている。確かに日本のメディアが報道するように中国の強力な言論統制や人権問題については非難してしかるべしだが、それはあくまで中国の一部分、側面でしかなく、その裏では急速に経済発展を遂げ、高度に発展し整備された都市が存在する。一方、最近は中国の GDP が日本を抜いて久しいこともあり、中国に対して経済大国としてのイメージを持つ日本人も多いとも感じる。ただ、これもまた一側面でしかなく、実際には非常に大きな経済格差が存在し、一人当たり GDP は日本の 3 分の 1 ほどでしかなく、経済の中心である上海においてすらアルバイトの時給はおおよそ日本の半分以下となっていて、日本国内での一般的なイメージとは乖離があると感じている。また、実際に現地で生活する中国国民は、言論統制や中国国内メディアの影響も強いとはいえ、政府による自由の制限に対する不満は必ずしも大きくなく、私の感覚的には大部分の人が自由の制限に対して理解を示し受け入れている。日本国民は本来このようなことも含め、包括的に中国について理解すべきであるが、日本の報道では中国に関する一部分の情報しか取り上げられることがなく、中国に対する偏ったイメージを自然と形成することに繋がっている。

中国は今後も日本にとって切っても切れない関係を持つ国であり、中国について複数の視点で捉え、より正確に理解し、また民間レベル、個人レベルでは相互交流を深め、友好の輪を広げていくことが重要になる。私自身、中国共産党の非自由民主主義的、非人道的政策については批判的なスタンスを持っているが、中国人の生活様式や考え方からは学ぶことが多く、日本人と中国人は互いに学びあうことができる関係であると信じている。そのため、私は今回の訪中で体験したり学んだりしたことを踏まえながら、少しでも多くの人に日本人の一般的なイメージとは異なる中国の姿を発信するとともに、中国や中国人との交流の魅力を伝えていきたい。私がそのように中国についての一般とは異なる視点を提示したり、日本人とは異なる考え方の魅力について他者に伝えることが、日中の友好だけではなく、日

本の途上国を中心とする外国一般に対する無関心や偏見の克服や、異なる価値観から学んだり、異なる文化について別の視点から捉えなおしたりすることの重要性をより多くの人に理解してもらうことに繋がり、日本社会の発展にも繋がると考えている。

「ご縁に感謝」
1-B　愛知県立大学　鈴木里彩

私にとって、この 7 日間の訪中を一言で表すとするならば、「ご縁に感謝」である。また、今回の訪中の経験は、大学一年生の頃中国語の授業で習った熟語を思い出すきっかけとなり、その意味の深さを身をもって感じる機会となった。

私は今回の訪中を通して、日々の生活がどれだけ多くの方に支えられて成り立っているかを改めて感じた。中国語の表現で「在家靠父母，出门靠朋友（家では両親に頼り、外では友人に頼る）」というものがある。この熟語を習ったばかり頃の私はこの言葉に対して、「周りに頼りすぎなのでは？」、「もっと自立すべきなのでは？」という考えを抱いていた。しかし、今回家族もいなければ親しい友人もいないそんな環境の中で、実際に、団員同士で足りないものがあれば共有し合い、困っている団員を見かけたら知り合いかどうかにかかわらず、自ら積極的に助けようとする団員の姿を見た。また、個人的なトラブルに関しても、親身になって話を聞いてくださる日中友好協会の職員の方や現地ガイドの方にも胸を打たれた。

そんな経験から、私は「在家靠父母，出门靠朋友」という言葉を思い出した。そしてこの言葉は、「迷惑をかけることが必ずしも悪いことではなく、頼れる相手がいることの幸せを教えてくれようとしているのではないか」と考えるようになった。

今回の訪中は、数えきれないほど多くの方々の支えがあってこそ成り立ったものだと心から感じている。WeChat ペイのやり方や現地の気候について教えてくれた上海赴任中の父、一緒にパッキングをしてくれた母、団員の選抜から随行までを担ってくださった日中友好協会の職員の方、7 日間を共に過ごした団員、北京から上海まで随行してくださった中日友好協会の職員の方、北京外国語大学並びに西安外国語大学の関係者の方々、現地ガイドの方、バスの運転手の方、空港の職員の方など、多くの方の支えがあった。これらの方々のおかげで、楽しい時間を過ごすことができ、無事に訪中を終えることができた。
以上の通り、多くの方の優しさを感じ、温かさに触れたことで、「在家靠父母，出门靠朋友」の言葉の意味の深さを身をもって感じることができた。

また、私は訪中の際から帰国後の今まで、川津隆団長の「出会いで君は変わる、出会いで君はできる」という、この言葉が頭から離れない。
私自身過去に多様なアルバイトや留学を通して、バックグラウンドの異なる人たちと出会い、交流を深めることで、互いを理解し合ってきた。また、自分を見直す機会となった

就職活動を通して、これらの出会いはまさに、自己成長を遂げるためにとても重要なきっかけであると気がついた。そのため、「出会いで君は変わる、出会いで君はできる」という川津団長の言葉に深く共感している。

今回の訪中を通して、数多くの尊敬できる友人に出会うことができた。その友人の多くが社会問題に目を向け、「自らが何かできないか」と考え積極的に行動していた。そんな尊敬

する友人たちとの出会いを通して、私はより一層広い視野を持って社会問題に向き合っていきたいと感じた。この訪中での経験は、私にとってとても大きな財産となった。今後の人生においても今回得た学びや気づき、そして人との出会いを大切に、社会のため、日中友好のために自分には何ができるか考えていきたい。

「異文化理解の第一歩」
1-B　静岡県立大学　是津 みなみ

この 7 日間は私にとって初めての訪中であり、毎日が刺激的で学びの多いものとなった。私の訪中前の中国のイメージは正直なところあまり良いものとは言えない。しかしこのイメージとは、学校教育やメディアによる偏向報道によって無意識に形成されたものかもしれない。だからこそ、「百聞は一見に如かず」という言葉があるように自らの目で確かめ、肌で感じ、改めて日中関係について考えたいと思い今回の訪中に至った。

実際の中国の大都市に足を踏み入れ、独創的な高いビル、何車線もある道路にびっしりと詰まった車や電動バイクに圧倒された。特に 4 日目の西安でのハイテク産業開発区の見学や最終日の上海の街並みでは中国の最先端の技術と急速な経済発展を感じさせられた。また買い物中でも Alipay や WeChat pay などのキャッシュレス決済が主流であり、日本のキャッシュレス決済比率 4 割未満という数字と比べると差は明らかに感じる。
飛躍的な発展と遂げる一方で、古代からの豊かな歴史と文化が息づいており、多くの歴史的建造物から中国文明の奥深さと影響力を実感することができた。特に世界遺産に指定されている兵馬俑は、一体一体違う顔・服装をしており、その規模感には当時の皇帝の権力の壮大さを感じるものであった。

また、北京外国語大学や西安外国語大学の学生との交流は中国のリアルな生活を知ることのできる、とても良い機会となった。両大学の学生も非常にあたたかく、日本に興味を持ってくれていることを嬉しく思った。特に北京外国語大学で案内をしてくれた学生は院生で、現在同時通訳者を目指して日本語を学んでいるということもあり、日本語のレベルは想像以上であった。私自身あまり中国語が話せないことから、現地大学生との交流に不安があったが、非常に流ちょうな日本語で大学の案内をしてくれた。移動中には中国の大学生の生活、就職活動、流行りものなど、個人での中国旅行ではできなかったであろう体験ができ、改めて訪中団に参加した意義を感じた。

様々な素晴らしい体験、中国の人々の温かさを肌で感じることができた一方で、日中関係の緊張感に改めて気づかされる事件もあった。私たちが訪れた上海の隣、蘇州で起きた日本人親子が刃物で襲われ、かばったバスの案内係の中国人女性が 亡くなってしまった事件である。この訪中で出会った北京外国語大学や西安外国語大学の学生、案内をしてくださった方々、中日友好協会の方々、皆さんとても暖かい人ばかりであった。しかし、日本に対してよく思っていない人がいるのも事実である。今回の訪中は中国からの温かい歓迎のもと、食べきれないほど多くのおいしい料理ときれいなホテル、日本語の上手なガイドさんによる引率のおかげで、大きなトラブルもなく 1 週間を終えることができた。その反面、中国の良い面だけしか見る機会がなかったようにも思う。だからこそ、まだ見れていない中国の側面について知るためにまた訪れてみたいと思う。そして、その時自分の中国に対するイメージの変化について再度考えてみたいと思う。

現在の日中関係は歴史的・政治的な問題からも良好なものとは言えないが、互いの文化的・経済的なつながりが深いのも事実である。個人でできることは大きくないが、今回の訪中での経験を無駄にしないよう、中国について学び続け、異文化理解に努めていきたいと思う。

「「広大な国」中国を訪れて」
1-B　東京大学 曽根崎巧真

本稿を執筆するに先立ち，今回のような貴重な訪中の機会を頂けたこと，そして 7 日間の日程を，不自由なく安全に過ごせたことについて，本プログラムの準備・実行に関わられた関係者の方々全員に対して感謝の意を表したいと思う。

さて，私が中国の地に降り立ったのは今回の訪中が初めてであり，その分，今回の訪中プログラムを通じた経験は私にとって非常に刺激的であり，自分の中国に対するイメージ像にも大きな影響があったと感じる。

そもそも私が中国という国に持ち始めたのは，私が高校一年生の冬に中国語を自学し始めたときであり，中国語で歌われているある曲を聴いたことがきっかけだった。歌詞もわからぬままこの曲を聴きながら，海を隔てた向こうには自分が全く知らない国があるという事実に好奇心が擽られ，次第に中国という国，そしてその文化へと興味を持つようになっていった。中国語が上達してくると，より多様なソースからより多くの中国に関する情報を得られるようになり，それにつれて日中両国民が互いをどのように捉えているのかについて考えさせられる機会も増えていった。その中で私が感じたのが，両国民の互いに対する異様なほどの「無知」であり，その「無知」ゆえに偏見に満ちた不信感ばかりが先行し日中関係の足枷になっていると思うようになった。私が今回の訪中に参加した主な目的のうちの一つが，この「無知」の現状について知り考えることであったわけであるが，実際，この 7 日間の訪中を通じてある程度この問題に触れることが出来たのではないかと感じる。

少し話は逸れるが，今回の訪中の中で私の印象に強く残っている景色が一つある。景山公園から見た紫禁城とその背後に広がる北京の街並みである。もちろん斜陽に照らされオレンジ色に染まった北京の街が美しかったということもあるが，眼下にどっしりと紫禁城が鎮座し，その先見渡す限りに大地が広がっていたこの風景に，思わず電撃が走った。中国の国土の広大さについてはもちろん統計上の数字として認知はしていた が，私はその事実を，この瞬間に肌をもって実感したのだ。景山公園で感じたこの中国の「広大さ」は，この訪中の 7 日間を通じて私は繰り返して感じることとなった。朝ラッシュを迎えた北京の長安大街，居庸関で見た万里の長城，観光客でごった返した兵馬俑，飛行機の窓から見えた揚子江など，ふとした景色に中国の広大さを再認識し，その度に圧倒された。

さて，話は日中関係に戻るが，この「中国は広大である」という認識は日本における対中理解を深める上では欠けてはならない見方であるように思える。というのも，大多数の日本人が，日常的なコンテクストで中国という国やその人々について語る際，過度に一般化されたイメージをもって，それらを何か均一化されたものであるかのように語ることが多いように感じられるからだ。「中国は〇〇だ」「中国人は〇〇だ」などという語り節がその典型例である。これには，中国の特殊な政治，社会環境ゆえに我々外部の人間がその内情についてなかなか知り得ないという背景事情もやはりあるだろう。しかし，現実として中国は日本の

約 25 倍の面積と約 12 倍の人口を抱える大国であり，我々が思う以上にはるかに多様かつ複雑な国である。今回は北京，西安，上海の三都市を訪れたわけであるが，街が違えば気候や食，さらには人に文化までがまるで異なっている様子は団員の皆が目のあたりにし，感じたことであろう。これほどに広大な国の 人々と真の意味での相互理解を図るには，彼らの一面的な一般化は非常に危険であり，常に自分がまだ知らない中国を見つめ，知っていこうとする姿勢を持ち続けるべきであると強く感じた。

今回の訪中では，数々の中国人の方から温かい歓迎を受け，丁重に遇され，大変貴重な経験をさせていただいた。日中関係は現状として決して良い状態にあるとは言えないが，日中両国民が幅広い交流のパイプを維持し，表面的な交流にとどまらず，互いが抱える問題を直視した建設的な対話への弛まぬ努力を続ければ，必ずや日中友好の道は開けると考える。本訪中団に参加した団員の一人として，今回の経験を糧に今後その一助となっていければ幸いである。

「訪中を終えて」
1-B　青山学院大学　藤原璃奈

私が中国へ足を踏み入れたのは今回の訪中が初めてだった。高校時代から中国語を学んでおり、ネイティブの方との交流もあったが、訪中で中国社会・同年代の中国人に肌で触れ、今までの認識と実際の中国社会・中国人との間にギャップがあったことに気づき、同時に大きな学びを得た。

特に大きなギャップを感じたのは学生交流時だった。北京外語大学や西安外語大学での学生交流では、想像以上に現地の学生と打ち解けられたことに驚きと大きな喜びを感じた。同年代の中国人との交流が初めてだった私は交流に対する期待とコミュニケーションを上手く取れるかという不安な気持ちが入り混じっていた。しかし、実際に交流してみると先ほどまで抱いていた感情が嘘だったかのように、とても楽しく、親睦を深めることができた。それ は、驚くほど多くの学生が日本語を流暢に話していたり、日本のテレビ番組に詳しかったりと、中国には熱心に日本のことを知ろうとする若者が大勢いることを知り、喜びを感じたからだろう。学生交流は私のイメージをはるかに超えるほど楽しいものだった。

このギャップから学べることは、「国家」としての中国と中国に住む個々の「人」を区別して考えることの重要性だ。日本にいれば、やはり中国に対してマイナスなイメージを持つこともあるだろう。テレビや新聞を介して中国のことを知る機会が多く、そこで取り上げられるものの多くは処理水放出をめぐる問題や尖閣諸島問題など、決して穏やかとは言えない内容ばかりだ。このような中国報道に影響を受け、私たちは中国に対してマイナスなイメージをもったり、強めたり、それを自然と中国人に投影したりする。実際、訪中以前は、中国人と真の交流ができるか疑っている自分がいた。しかし、訪中で出会った学生らは私たち団員を盛大に迎え入れてくれた。ディスカッションでは、日本人と中国人との間に様々な共通点があることも発見した。両国ともに手厚いおもてなし文化を持っていたり、就活の厳しい現実に直面していたり、似通った流行り言葉やポーズが存在していたり、と様々な点で日本と中国に似たものを感じ、交流を心の底から楽しむことができた。何より、民族を越えて仲良くなれたことが嬉しかった。国家間で摩擦や問題が存在するのも事実だが、それが「人」の交流を途絶えさせる理由にはならないことを改めて学んだ。

私たちが今回触れた中国は一部に過ぎず、日本に対してネガティブな印象を持つ人も大勢いるだろう。政府と個人を切り離して物事を捉えることは大切である一方で、日中間に存在する問題から目をそらしてしまえば、真の友好関係を築くことはできないはずだ。訪中を通して出会えた中国人の友達との交流を大切にし、今後も友達としてあり続けながら、日中が抱える問題について多角的視点をもって考え続けていきたい。

最後にこのような素晴らしい機会を設けてくださった日中友好協会、中日友好協会の皆様、そして 1ーB 班の最高な仲間たちに心から感謝したい。

「中国と私、私と中国」
1-B　慶應義塾大学　前原剛

中国と私との出会いは、地元の栃木県足利市、足利学校に受け継がれてきた孔子の「論語」教育でした。小学校の朝の時間に「子曰く、」から始まる文章を朗読したことは、まさに中国と私とが接触した瞬間であります。今でも私の心を突き動かす中国思想は、私を形成してきたと言っても過言ではありません。このたびの中国訪問によって、論語という書物を通して結ばれた受動的な「中国と私」から、向き合ってゆく対象として、能動的に関わってゆく「私と中国」の未来について考えるきっかけとなりました。

中国を代表する北京、西安、上海という三大都市を訪問し、私はまさに、人類史の交差点に立てたような気持ちです。北京では、壮大な故宮や万里の長城を訪問し、その歴史の奥深さに感銘を受けました。そして、首都のエネルギーと緊張感を肌身で体感し、現代の中国が未来へ向かって進んでいる様子を、鑑みることが出来ました。西安では、シルクロードの起点として街全体が歴史の生き証人であるかのような感覚を堪能し、私たちにとって、過去の歴史と未来の架け橋を築くヒントを、豊富に示してくれました。可能であれば、上海にもあと数日、居れたら良いのにと思ってしまいます。

さて、今回の訪問を通じて、私は幾つか考えていたことがあります。それは、日中・善隣友好とは何か、何が日中関係を規定するのか、日中の未来をどのように紡いでゆくべきなのか。という問いです。

いつの時代も、日本にとっての中国は、比類なく大きな存在であり続けています。1972年、日中国交正常化にあたっては周恩来氏、廖承志氏をはじめとした知日派の多大なる導きが当時の日本政治を動かし、両国は正式に国交回復を成し遂げました。それは、現代東アジア国際政治の原型となっています。日本にとっても日中国交正常化は、政治家や官僚のあるべき姿を示唆しており、いまに生きる歴史です。そうした過去の重要な分水嶺を越え、現在、私たちの世代は、これからどのようにして互いに向き合ってゆくべきか、今回の訪問を通して大きな希望とともに、課題も見えてきました。

私の尊敬する親族は、いつの時代もリアリストでありなさい、との教えを残しています。それは何かというと、「ひとりの、確かな人を知っている」ことに他なりません。その点、今回の訪中では様々な中国現地の皆さんと直接お話し、知り合うことが出来ました。改めて素晴らしい機会だったと振り返ります。また、訪中をきっかけに「10 年後の私は、どうなっているのだろうか」と考えました。

私は、杉原千畝がそうしたように、憎しみが連鎖する世界で、その鎖を解きほぐす、世界の平和に向けた歩みに、一翼を担う人間になりたいと考えています。私がはじめて戦争を生身で経験したウクライナでは、悲しく、残酷な現実を、あまりに見てしまった気がします。したがっ て、人の痛みを自他未分離的に感じ取れる人でありたいです。そうした想いは、隣国である中国に対しても変わりません。これまでも、そしてこれからも、日中関係には、と

きに、挑戦が伴います。それゆえ、表面的な交流や友好だけでは、本当の意味での信頼、友好関係は、叶わないでしょう。時に政治について、経済について、文化について、そして両国の未来について、私たち若者は、自律性のある知性を学び、身につけ、理性を持って対話し、議論し、新しい時代を切り開いてゆく必要があります。両国の繁栄と平和を本当に追求するのであれば、避けては通れない難題が数多く存在します。訪中した私たちが視座高く、それらに向き合ってゆくことができれば、日中の未来は明るいでしょう。

今回、私たち日本の若者と中国との間に掛けられた友情は、万里の長城のように強固であり、シルクロードのように広がり続けると、私は信じています。

最後に、この旅を共にした仲間たち、そして温かく迎えてくださった中国の皆さんに、心からの感謝の意を申し上げます。これから私たちは、両国の架け橋となり、共に明るい未来を築いてゆきたいと思います。ありがとうございました。

「多くの学びとこれからのこと」
1-B 金沢大学　森井結衣子

今回の訪中での様々な経験から、中国に対するイメージが変わることや更新される出来事があった。例えば、北京や西安のまちなかは大きなビルや施設が目立つのだが、同時に街路樹の多さが目につき、緑化が進んでいると感じた。またシェアサイクルが多く設置されており、大通りには自転車専用道路がある。シェアサイクルの使用方法も私の住む金沢市のものより簡単で使い勝手がよい。このような環境に優しい取り組みをまちなかで目にして、これまで中国の環境といえば、大気汚染や開発による二酸化炭素の排出など問題視されるものが多いイメージだったが、実際には上記のような環境に配慮した取り組みがされており、レンタルサイクルの仕組みや街路樹の植え付けに関しては日本の都市より進んでいると感じた。移動中にバスの車窓から見える景色が中国に対するイメージを変える経験になった。中国の積極的な取り組みを感じた一方で、公衆トイレの不衛生さや使用しにくさを体験し、日本の公衆トイレの良さに気づくことができた。トイレットペーパーが個室に常備されることやトイレットペーパーを流しても大丈夫であることは、日本で生活していると当たり前だけど、中国ではどちらも当たり前ではなかった。中国での体験と日本での日常を比較して新たな気づきを得ることができた例である。

中国人学生との交流では、日傘を差して歩いてくれたり、写真をとってくれたり、おごってくれたりと中国人学生の優しさにふれる機会がたくさんあった。私たち日本人学生との交流を楽しみにしてくれていたことが伝わりうれしかった。北京外国語大学で現地の学生と日中の芸能人について話をしたとき、中国人学生はピアニストや俳優、アーティストなど様々な分野で活躍する日本人を知っており話が盛り上がった。アニメだけではなく日本のドラマや音楽を知ってくれている学生がいることに驚き、自分は中国語を勉強していたにもかかわらず、中国の芸能人や音楽には無関心であったことを後悔した。北京外国語大学では卒業シーズンで、ガウンを着た卒業生が写真撮影をしていた。日本のほとんどの大学で卒業生は袴やスーツを着用する。そんな会話を中国人の学生としながら、どうして日本の大学ではガウンを着ないのか、卒業式にガウンを着ることが多数派なのかなど疑問が浮かんだ。異なる国の人と話す時、いつも自分の知識不足にぶつかりうまく説明や理解ができない。今回の中国滞在中も学生との交流や観光地の見学を通して、もっと知りたいこと、知るべきことをたくさん発見した。大雁棟や兵馬俑を訪れた時は、そのものが持つ歴史的価値や背景を知っていると異なった楽しみ方ができると感じた。現在起こっている問題には必ず歴史的事柄が関係している。日中間でも歴史的事実を理解した上で、関係性を築くことが重要であると改めて感じた。今回中国を訪れたことで、中国の歴史や日本と中国の関わり、戦時中の関係性など中国とのこれからを築くために学び直す必要があると考え、新たな学びを始めるきっかけになった。

中国で経験したことからの学びと同時に、一緒に時を過ごした団員や日中友好協会の事

務局の方々との出会いからも大きな刺激を得ることができた。同じ班だったメンバーは個性豊かで、班員一人一人と話をして相手を知ること、自分を知ってもらうことがとても楽しかった。志願して訪中団に参加しているだけあり、どの人も積極性があり、自分をもっている人だった。目標に向かって行動を起こしている人、興味を突き詰めている人など同じ学生として刺激をもらうことができた。現地ガイドをしてくれた方々は、私たちを暖かく迎えてくれて、大人数を導く姿勢はとても頼もしく、充実した経験になったことはたくさんの人の努力があったからであることを改めて実感している。日中友好協会・中日友好協会事務局の方々は、団員みんなが安全に訪中を終えることができる用に常に気をはって過ごされていたと思う。日中友好を願い、若者にその機会を与える活動に尽力される姿を間近で見させていただき、素直にかっこいいなと思った。大学卒業後、自分はどんなことをして社会に貢献できるのかそんなことを考える時期にさしかかっている私にとって、今回の訪中で出会った皆さんの姿勢は刺激的で今後も折りにふれて背中をおされる存在になった。団長が繰り返しおっしゃっていた「出会いに感謝」という言葉、本当にこれにつきると感じる。人、文化、歴史など今回の訪中を通したすべての出会いに感謝し、出会いから得た気づきや学びを今後の自分に還元することによって、この訪中に参加したことを単なる思い出ではなく、きっかけとして新たな行動を起こす足がかりにしたい。

「7 日間での出会いと交流」
1-B 北九州市立大学　山下千絵

三つの都市を巡り、兵馬俑や万里の長城、黄浦江の夜景やハイテク企業の見学など非日常が詰まった贅沢すぎる一週間の中で、心を一番動かされたのは様々な人との交流でした。ほんの一部ではありますが、このレポートに、かけがえのない出会いと交流の記録を残したいと思います。

まず、団員同士の日日交流のなかで、訪中後にも連絡を取り合い、会う約束を交わせるような友人との出会いがありました。様々なバックグラウンドや考え方をもつ彼女らと、「初めての訪中」という人生で一度きりの思い出を共有できたことが嬉しく誇らしいです。疲れ果てて戻ってきたホテルでも、昼間にはなかなか話せないような人生や哲学的な話を真剣に話し合ったり、まったくくだらない話で盛り上がったり、まるで高校生の修学旅行のような思い出深い時間となりました。悩みを打ち明けられるだけでなく、お互いの目標や夢、頑張っていることを共有し、鼓舞しあえる仲を築くことができました。日日交流のおかげで、視野が広がり、自分自身ももっと頑張ろうと帰国後のモチベーションがあがりました。

続いて、学生同士の中日交流について、北京外国語大学では、ディスカッションを通して現地学生と交流を深めました。私が参加した話し合いのなかでは、まず 1 人づつ中国語/日本語を勉強しはじめたきっかけを言っていきました。私自身、中国の音楽がきっかけで中国語の発音に魅了されたのですが、中国人の学生たちのなかにも、偶然日本人が作った音楽を耳にし、日本に関心を持ったり、日本のアイドルグループの曲の歌詞に励まされたりしたなどのエピソードを持つ方がいらっしゃり、やはり音楽や芸術は国境を越えて人々の心に訴え感動を与えるのだな、と実感しました。

また、西安外国語大学では、一対一で現地学生と交流でき、日本語学科 1 年生の女子学生とペアになり、仲良くなりました。会って自己紹介を終えたすぐそばから手を繋いで引っ張ってくれるなど、初めこそ距離の詰め方に戸惑いはしたものの、西安や大学について教えてくれたり、食堂をまわりながらおいしいお店や食べ物を一生懸命紹介してくれた り、本当にあたたかく接してくれました。彼女が河北省出身で、私も今年の夏には北京に語学研修で滞在する予定なので、もう一度会うことを約束しました。今回は思ったことや感謝の気持ちなど、上手に言葉にすることができなかったので、次会うときは、もっともっとたくさん話せるように、中国語の学習を頑張ろうと思いました。

中日交流のなかでも印象に残っているのが、万里の長城で出会った中学生の女の子です。私は入口付近ですでに瀕死状態となってしまったため、班の友達と休憩してから、のんびりと下山していたところ、前を降りていた子どもたちのうち一人の女の子がふりかえって話しかけてくれました。「旅行に来たの？」「中国には美味しい食べ物がたくさんあるんだよ」安徽省から遠足に来ていた中学生でした。とても人懐っこく、自分の母国のことを誇らしげに話してくれ、最後には他の子たちと一緒に手を振ってくれました。ヘロヘロに疲れていた

はずの心と体が一瞬にして元気になりました。後になって私は彼女に対して考えたことが二点あります。一点目、興味がなかったのか、あるいはすでに知っていたのかもしれませんが、彼女は私にどこから来たのか、何人なのか、尋ねませんでした。街や店で出会った人々には高確率で何人か尋ねられていたのに対し、彼女の無邪気な様子が新鮮でした。二点目、彼女の母国への関心の高さに感心しました。私が彼女と同じ年頃だったとして、同じ状況におかれても、日本にはあれがあってこれがあって、とってもいい国なんだよと言っている姿など到底想像できません。万が一再会できたとき、彼女を日本旅行に勧誘するためにも、彼女を見倣って、母国や故郷と向き合い自身の思う魅力を探していかなければと思いました。

「出会いで人は変わる」川津団長が繰り返しおっしゃっていたこの言葉。歓迎レセプションのときと最終日の歓送会のときとでは、私自身の受け取り方に大きな変化がありました。国籍も年齢も関係ない、この訪中でのいくつものかけがえのない出会いが、私の新たな未来を作り、前進し続けるための活力になります。これらの出会いを大切に、再会の約束を重ねて、さらなる日中友好の未来まで繋いでいきます。